

論文内容要旨

論文題目

死別後支援が必要な家族介護者を訪問看護師が予測する要因の抽出

教育・研究領域：生涯生活支援看護学

氏名：工藤 朋子

【内容要旨】

死別後支援が必要な家族介護者を訪問看護師が予測する要因を抽出するために、15 事業所の訪問看護師が主治医より終末期と説明があった利用者の家族介護者 170 人を対象に、死別後支援を予測する要因の調査（死別前調査）、死別後支援の必要性の調査（死別後調査）を行った。両調査が行われた 105 人のうち同意を得た家族介護者 30 人に、研究者が聞き取りによる質問紙調査を実施し、訪問看護師の判断を検証した。死別後支援の必要性の有無を目的変数、死別前調査の要因 22 項目中 5 項目を除外した 17 項目を説明変数に数量化 2 類を行った結果、治療中の疾患の有無、医療に対する不満の有無、経済的負担の有無など 7 項目が抽出された（判別的中率 76.7%）。訪問看護師による判断は、うつ病自己評価尺度 CES-D、健康関連 QOL 尺度 SF-8™ で妥当性が検証された。死別後支援が必要な家族介護者をアセスメントするツール開発の可能性が示唆された。

平成 30 年 1 月 22 日

山形大学大学院医学系研究科長 殿

学位論文審査結果報告書

申請者氏名： 工 藤 朋 子

論文題名：死別後支援が必要な家族介護者を訪問看護師が予測する要因の抽出

審査委員：主審査委員 佐 藤 幸 子

副審査委員 佐 藤 和 佳 子

副審査委員 古 瀬 み どり



審査終了日：平成 30 年 1 月 18 日

【 論 文 審 査 結 果 要 旨 】

本研究は、死別後支援を必要とする家族介護者を、訪問看護師が予測する要因を抽出することが目的である。

訪問看護ステーションの利用者は 80 歳代が 35.8% と多く、今後、利用者を老々介護した後に独居となり、閉じこもりや要介護状態で支援を必要とする介護者の増加が考えられる。死別後に支援が必要となる介護者を死別前から予測することができれば、適時的な介入や予防的な支援が可能となる。

調査は死別前に予測するための要因（説明変数）の調査を行い。死別後に支援の必要性の判断（目的変数）について調査し、数量化 2 類により分析した。また、死別後の支援の必要性の判断については、健康関連 QOL やうつ病自己評価尺度との関連により妥当性を検証した。

その結果、支援の必要性を予測する要因として、「治療中の疾患」、「医療に対する不満」、「経済的負担」、「同居家族の協力」、「頼れる別居家族（親戚）」、「周囲の助けを遠慮する傾向」、後期高齢者夫婦世帯」の 7 項目が抽出された。判別の中率は 76.7%、相関比 0.42 ($P=0.000$) であり、予測する要因として妥当であると考えられた。

以上のことから、今回抽出された要因を、死別後支援を必要とする家族介護者をアセスメントするためのツールに活用できる可能性が示唆された。

審査においては、研究の意義の確認や、質問項目の抽出方法の妥当性、分析の信頼性、臨床的な応用に関する考察の妥当性等が指摘され討議された。審査委員の指摘に対しては論述の追加がなされ、適切に加筆修正されたことを確認している。

以上により、本論文は看護学の博士論文に相応しいと判定し合格とする。